シンポジウム報告

大連YMCAと「文明化の使命」

高嶋　　航（京都大学）

The Dairen YMCA
— A case of Imperial Japan's Civilizing Mission in Manchuria —

TAKASHIMA Ko
(Kyoto University)

はじめに

ご紹介ありがとうございます。京都大学の高嶋です。本日は大連YMCAを取り上げ、帝国主義と「文明化の使命」について考えてみたいと思います。

よく知られるように、YMCAは20世紀前半にアジア各地でスポーツの発展に貢献しました。YMCA、とくに北米YMCAがアジアへと進出した背景には、19世紀後半以来のアメリカの帝国主義的拡大があり、アメリカ帝国主義と北米YMCAは共犯関係にあったということができます。

帝国主義はその支配を正当化するために「文明化の使命」というレトリックを援用しました。しかし、このレトリックは支配を正当化するだけでなく、支配に対する抵抗を正当化する口実をも提供しました。というのも、文明化の対象が文明の段階に達してしまえば、「文明化の使命」はもはや用済みとなってしまうからです。そこで支配者は文明化の達成の判断を先延ばしし、支配の永続化をはかりますが、被支配者はこの論理を逆手にとって、文明化を達成したという成果を支配者につきつけ、さらなる植民地支配の不当を訴えたのです。そのさい、勝敗が明確なスポーツは、文明化の進展具合を示す手立てとして、支配者と被支配者の双方に利用されることになります。

YMCAにとって、「文明化の使命」とはキリスト教への改宗を意味しました。精神、知性、身体の調和・発達を掲げるYMCAは、「神の宮」たる身体の健全な発達に力を注いだ点で、当時のキリスト教のなかでは特異な存在でした。19世紀末以降、YMCAは組織的体系的にスポーツ事業を展開します。スポーツは、YMCAのおもなターゲットである若い男性をキリスト教に引きつける回路の一つでもありました。またアジアでは、スポーツも「文明化の使命」の一翼を担い、現地人を文明の高みに引き上げる手段とみなされました。スポーツを教え、スポーツで勝つことは、西洋人の優位性のなによりの証左であり特権だったのです。やがて現地人がスポーツに勝ち、現地人自らスポーツを教えるようになります。この変化は、しばしばナショナリズムの文脈で、あるいは他者への「文明化の使命」として、語られることになります。ナショナリズムと「文明化の使命」は一つのコインの裏表であると言ってもよいでしょう。

スポーツを通じた文明化は、時代や地域によってかなりバリエーションがあります。その全体像を明らかにするには、事例研究を積み重ねていく必要があります[1)]。本報告はそうした試みの一端にすぎません。

ではなぜ大連YMCAを取り上げる必要があるのでしょうか。これまで研究がなされていないという理由のほかに[2]、大連が東アジアにおけるYMCAの展開のなかで得意な位置を占めていたことが挙げられます。北米YMCAにとっては、日本もまた「文明化の使命」の対象でした。一方、日本YMCAは日本の帝国主義的拡大とともに、朝鮮や満洲にもネットワークを広げていき、自ら「文明化の使命」を遂行することになります。朝鮮と満洲は、中国を拠点とする北米YMCAのネットワークと日本のYMCAのネットワークが重なり合う場であり、アメリカ帝国主義と日本帝国主義がぶつかり合う場でした。西洋にとって文明は普遍的な価値でしたが、日本はこれを東洋に特殊な文明と読み替え、日本だけがアジアを文明化できると主張しました。

朝鮮のケースを見てみましょう。ソウルでは1903年に北米YMCA主事ジレットが中心となって皇城YMCAが設立されます。一方、1908年には日本人を対象とする京城YMCAが設立されました。外国の影響下にある皇城YMCAは日本の官憲の力が直接及ばなかったため、朝鮮ナショナリズムの根拠地となりました。朝鮮人は西洋の帝国主義によって日本の帝国主義に対抗したのです。それゆえ皇城YMCAで行われたスポーツ活動は、朝鮮ナショナリズムと不可分の関係にありました。内鮮融和、同化政策の一端を担った京城YMCAと皇城YMCAの関係は葛藤に満ちたものでした。

1906年に設立された大連YMCAは、北米YMCAから派遣されたヒッバード（Carlisle V. Hibbard）が、資金や運営の面で重要な役割を果たしました。ただし、朝鮮のジレットと違って、ヒッバードの地位は名誉主事にすぎません。北米YMCA主事たちを「名誉」職にとどめたのは、日本の他のYMCAも同じでした。「文明化の使命」の主体であろうとした日本は、西洋の「文明化の使命」の対象となることを拒否したのです。

大連YMCAは、日本人が現地人に「文明化の使命」を遂行する場である外地にあって、日本人と西洋人が協力して日本人に対する活動をした（北米YMCAからみれば、日本人に対する「文明化の使命」を遂行した）という点で特異でした[3]。朝鮮で皇城YMCAが果たした役割を大連で担ったのは、中国人の民族主義団体、大連中華青年会でした。この点は、植民地と租借地の違いが反映されていると考えられます。関東庁当局は大連中華青年会の活動を禁止することができませんでした。

以下では、大連YMCAのスポーツ事業を４つの時期に分けて見ていきます。第１期（1906－1920）は、北米YMCA主事の強い影響のもとで、大連YMCAが大連のスポーツ界を牽引した時期です。第２期（1921－1927）は、大連の日本人と中国人の双方でスポーツが勃興する時期です。日本人側では満鉄運動会や満洲体育協会、中国人側では大連中華青年会が中心となり、YMCAは辛うじてバレーボールとバスケットボールで主導性を発揮するにとどまりました。第３期（1928－1931）は日中間のスポーツ交流が活発化する時期です。バレーボールとバスケットボールは、日本人と中国人が交流できる数少ない競技であり、YMCAはスポーツ交流を取り持つ役割を果たします。第４期（1932－1945）は満洲国の時代です。スポーツは民族協和の重要な手段となり、大連YMCAの関係者らは、それまでのスポーツ交流で培った経験を生かし、満洲国の諸民族に対する「文明化の使命」に参画していくことになります。

本報告で用いるおもな資料は、北米YMCA主事による年次報告、大連の新聞（『満洲日日新聞』、『大連新聞』、『泰東日報』）、大連基督教青年会編『恩寵廿年』（大連基督教青年会、1930年）です。講演要旨という本報告の性格上、いちいち典拠を示すことはしません。詳細はいずれ刊行される別稿をご覧ください[4]。

１．大連YMCAの創設とスポーツの導入（1906－1920）

大連とYMCAは、それぞれ日本とアメリカの

帝国主義の産物だったと言えます。大連は日露戦争の勝利によって日本の支配下に置かれますが、日本YMCAはこの戦争を積極的に支援しました。のちに大連YMCA名誉主事を務めるヒッバードは、日本YMCAが手がけた軍隊慰労事業の第一陣として満洲にやって来ました。日本YMCAは、兵士の入浴、散髪、家族との通信に便宜を図ったほか、新聞雑誌の閲覧、音楽、講談、伝道などの活動を行いました。興味深いことに、このとき大連で「軍隊慰労」の手段としてスポーツを活用したのは本願寺でした。

1906年11月に結成された大連YMCAは、宗教活動に加えて、講演会の開催や夜学校の運営を行っていました。1911年３月、名誉主事ヒッバードが北米で集めた資金をもとに、大連YMCA会館が建設されます。大連市内にはまだ原っぱが多く残っていた時代です。「千燭の電灯が輝き、想像だにしなかつた、整つた体育機具を設へた体育館が建てられ」たことは、「体育の言葉さえ一般化されてゐなかつた当時としては物珍しく且つ一つの驚異」でした。大連YMCAが大連スポーツ界の一大拠点になったことは不思議ではありません。

開館と同時に、ボーリング、柔道、撃剣、バスケットボールなどの活動が始まります。同年５月にはテニスコートが完成、ヒッバードが体育クラスを組織しました。翌月には、野球部、水泳部が設立され、ハンドボール、バレーボールなども行われます。ヒッバードは1911年９月付の報告書で、気候および社会的条件により体育事業が大いに必要とされるが、大連には日本で最良の体育館はあるが体育主事がいないと述べています。

指導者養成の問題は、1912年１月に北京の清華大学体育教授シューメイカー（Arthur Shoemaker）を招いて、２カ月半にわたって講習会を開くという形で解決します。シューメイカーはYMCA国際訓練学校で学び、アメリカ東海岸でプレイグラウンドの監督やYMCAの体育主事を務めたのち、中国にやって来ました。秋にはインドアベースボール場が新設され、内地に先駆けてインドアベースボールが行われました[5)]。ヒッバードは投手としても活躍します。

当時の会員名簿を見ると、日本人が575名、西洋人が18名、中国人が５名となっています。日本人会員の職業は、銀行（20名）、官吏（47名）、商人（69名）、職人（17名）、大企業の社員（211名、うち満鉄社員143名）、学生など（42名）、未分類（138名）でした。日本人以外にも門戸を開いていたとはいえ、実際に活動していた会員のほとんどは日本人でした。

1912年に大連にやって来た前田俊介は、「夜分なんか青年会に遊びにいけと勧められたものでここでは酒も煙草も喫はないのだからと、独身者には非常にいゝ所だから」と当時を回顧しています。都市の青年に適切な余暇活動を提供するというのは、1844年にYMCAが設立されたそもそもの目的でした。さらに前田によれば、「当時大連の運動の権利を握つてゐたのが青年会であつたのです。是が集会所みたやうなところで、冬になると冬の室内運動をしたり、又夏期になると夏の運動をやるといつたところ」でした。にもかかわらず、前田が勝手に野球チームを作ったために、YMCA側は激怒し、これに対抗して満洲倶楽部（満倶）というチームを作ります。この両チームの対抗戦は、やがて実満戦となって大連市民を熱狂させることになります。満倶は全国都市対抗野球大会でも２度優勝し、日本を代表する社会人野球チームとなりますが、YMCAとの関係はごく一時期に限られました[6)]。

大連のスポーツ界を牽引した大連YMCAは、当時の日本のYMCAのなかでは特異な存在でした。日本のYMCAで本格的なスポーツ事業が始まるのは、1913年秋に北米YMCAから体育主事ブラウン（Franklin H. Brown）が派遣されてからのことです。来日後、ブラウンは東京、横浜、京都、大阪、神戸、長崎、大連、ソウルの各YMCAを視察、日本のYMCAでは撃剣や柔術が見られるだけで、スポーツを重視していないというのがブラウンの結論でした。ブラウンが唯一肯定的に評価したのが大連YMCAです。そこは

「日本で唯一系統的な体育プログラムが実施されているYMCA」であり、そのプログラムはシューメイカーによって導入され、ヒッバードによって維持されていました。帝国日本の辺境である大連で、最先端の体育プログラムが実施されていたという事実は、日本のスポーツ史を考えるうえで重要な問題を示唆しているように思います。

一方で、ブラウンの評価じたいを評価する必要もあります。この報告書で判を押したように出てくるのが、「No Physical Director」という表現です。自らが体育指導者であるブラウンにとって、体育指導者の欠如は重大な欠陥に思われました。だからこそ、アメリカYMCAと同様のシステムが取り入れられていた大連に、ブラウンは「文明」の痕跡を見たのです。言い換えれば、大連YMCAこそ最も忠実に北米YMCAによる「文明化の使命」の一端を担っていたことになります。このような評価は、自らが親しんだシステムこそ最高のものであるという自信、あるいは偏見を反映したものでした。その後の歴史が示すのは、日本のスポーツ界の発展のなかでYMCAの影響力は（中国やフィリピンと違って）限定的なものでしかなかったということです。ブラウンが持っていた「文明化」の尺度は、日本の場合、あまり当てはまらなかったのです。

大連YMCAも1910年代後半には大連スポーツ界の脇役へと追いやられていきます。最大の要因は、1915年１月、ヨーロッパでの軍隊慰問事業に従事するため、名誉主事ヒッバードが大連を離れたことでした。北米YMCAは第一次世界大戦中に大規模な軍隊慰問事業を展開しました。スポーツはこの事業で主要な位置を占め、多くのYMCA体育主事がヨーロッパに派遣されたのです。

1915年秋、ソーディー（John B. Sawdey）とバワー（C. W. Bower）が来連、英語を教えるかたわら、YMCA体育部を指導しました（彼らはYMCA主事ではありませんでした）。翌年春に２人は満鉄慰藉係主任の大塚素に連れられて、奉天、長春、撫順を回り、バスケットボールとバレーボールを紹介しました。翌1917年春には芝罘外国語学校の学生が来連し、大連YMCAとバスケットボール、バレーボールの試合をしています。シューメイカーの招聘や芝罘外国語学校の来征は、大連YMCAが中国YMCAの人的ネットワークに包摂されていたことを示しています。ソーディーは1916年秋、バワーは1917年夏に大連を去りました。

ヒッバードが去ったあと、大連YMCAでは主事の守瀬與三吉と副主事の古閑亮の対立が激化します。この対立には野球も関わっていました。守瀬は有能で熱心なキリスト教信者でしたが、信者側にも青年側にも人望がありませんでした。古閑は「斯うしたグループの人に似ず砕けた人」で、信者側には評判が良くなかったのですが、青年側には人気がありました。古閑は野球ファンで野球部（1916年に再建された）を支援しますが、守瀬は運動競技に理解も興味も示さず、野球部にはひときわ冷淡でした。信者側も「青年会」の名前を冠した野球チームが教会のあらゆる規則を破り、「悪の世界の精神」のまたとない模範になっていると考えていました。ヒッバードの後任として1918年１月に着任したハドソン（Roy D. Hudson）は、守瀬と古閑の双方を大連YMCAから去らせることで問題を解決します。野球部はこのとき解散となったようです。こうして、大連YMCAは、大連で最も人気のあるスポーツで発言権を失うことになりました。バスケットボールやバレーボールも、YMCAを越えて広まることはありませんでした。

２．スポーツの勃興と大連YMCA（1921－1927）

1920年代に入り、YMCAの体育事業は２人の人物の加入により息を吹き返します。1921年に大連YMCA名誉主事に着任したダーギン（Russell L. Durgin）、その翌年に大連YMCA専任体育指導者に招聘された黒田善八です。

ダーギンは1926年まで、各種スポーツに選手として、審判として、役員として参加しました。そ

の後、東京に赴任したダーギンは、ロサンゼルスとベルリンの両オリンピックに日本代表のリエゾンオフィサーとして参加するなど、日本のスポーツ界に貢献しました。

黒田善八の前歴は不明です。1920年に同志社団の一員として大連外人蹴球倶楽部との試合に出ていることから、同志社の関係者と思われます。履歴には1923年に「日本基督教同盟主事養成所卒」とあります。黒田は大連YMCAに着任後、すぐに東京の主事養成所に派遣されており、それを最終学歴としたことから、同志社は中退していたのかもしれません。

1923年４月に大連YMCAのバレーボールチームは極東大会関東予選に出場しますが、これはそもそも東京に派遣された黒田が築いた人脈によって可能になったと思われます。当時男子のバレーボールはYMCAのほかではほとんど行われておらず、関東予選に出場したのも、東京、横浜、大連の各YMCAチームでした。大連YMCAは関東予選に優勝し、関西代表神戸高商との優勝戦に臨みますが、勝利を手にすることはできませんでした。

1920年代前半には大連YMCAや全満競技連合（1922年設立）の提唱で、大連でもバスケットボールやバレーボールのチームが結成されるようになります。全満競技連合主催の全満排球、籠球選手権大会は1923年、大連YMCA主催の全満籃球大会は1925年、全満排球大会は1926年に始まりました。バスケットボールとバレーボールに限らず、1920年代はさまざまなスポーツが発展をみます。その立役者が1921年に来連した岡部平太でした。岡部が中心となって、大連のスポーツ界は組織化が進んで行きます[7)]。

中国人側でもスポーツが勃興しました。その中心となったのが大連中華青年会です。大連中華青年会は五四運動を契機に昂揚したナショナリズムの気運を受けて、1920年に『泰東日報』編集長傅立魚によって設立されました。そのおもな活動は、講演会の開催、学校の運営、スポーツ事業の実施などでした。1921年に拳術部とサッカーチームが結成され、1922年に第１回陸上運動会、翌年に第１回水泳大会が開かれました。こうして大連の中国人は初めて競技の場を持つことになったのです。これらの大会は、初期には日本人の協力を仰ぎましたが、のちには中国人だけで運営されました。劉長春や史興隆などの名選手が生まれ、彼らは中国代表として、オリンピックや極東大会に参加しました。

1922年には、中国人側のYMCA、すなわち大連中華YMCAが設立されました。中華YMCAはサッカー、卓球、バスケットボール、拳術などの活動を行っていました。大連YMCAとも交流があり、『恩寵廿年』は、大連YMCA側からみた交流の様子を次のように記しています。

> 大正十三年に入り中華YMCAと連絡を取り、日華親善の一助として華人の参加を大いに歓迎し、毎夜四五十名の日華人青年が同一プレーを楽しみ、或は会食等を行ひ大ひに友情を加へた（同書209-210頁）。

ただし、中華YMCAは中華青年会ほど大きな影響力を持っていませんでした。会員数は多いときで350人ほど、これは中華青年会の３分の１にすぎません。1920年代前半は中国各地で非キリスト教運動が活発化した時期でした。

大連で中国人のスポーツはナショナリズムと強く結びつきながら発展しました。それは、日本の支配、あるいは日本による「文明化の使命」への抵抗とみることができますが、朝鮮の場合とは違って、非宗教的な形で進められたのが特徴です。

３．日中スポーツ交流と大連YMCA（1928－1931）

1928年６月４日、関東軍が張作霖を爆殺します。これまで満洲では、スポーツは日本人と中国人それぞれのあいだで盛んになってはいましたが、若干の例外を除いて、両者の交流はほとんど見られませんでした。しかし、張作霖を継いで新たに東北の支配者となった張学良は、一方で中国

ナショナリズムを鼓舞しながら、他方で日本側にスポーツの交流を呼びかけ、同年９月に日本人選手を奉天に招いて国際競技会を開いたのです。

その２カ月前、関東庁当局は傅立魚を逮捕しています。張学良に易幟を求める蔣介石の使者を援助したことが原因でした。傅は翌月に関東州から追放されます。大連中華青年会も大きな打撃を受けました。同会の民族主義的性格は、1925年の五卅事件や1927年の国民革命にさいして大連で反日運動が拡大するなかで、問題視されるようになっていました。傅の逮捕後、中華青年会は会刊の出版や講演会の開催を停止します。初等教育とスポーツ事業は存続を許されましたが、それまでのようにスポーツに民族主義的な意義づけをすることはできませんでした。日本人側は、大連の中国人のスポーツ活動を脱ナショナリズム化したうえで、奉天の張学良側とのスポーツ交流に臨んだ、ということになります[8)]。

日中間のスポーツ交流は、双方で共通して盛んな競技、とくに陸上競技、サッカー、バスケットボール、バレーボールで行われました。このうちバスケットボールとバレーボールはYMCAと関係が深く、大連YMCAはこの日中スポーツ交流で重要な役割を果たしました。

1930年９月時点での大連YMCAの会員名簿をみると、会員915人のうち、中国人は55人いました。注目すべきは学生会員で、89人のうち29人が中国人でした。大連YMCAは中国人の若い世代に浸透を図ろうとしたようですが、その成果は芳しいものではありませんでした。『恩寵廿年』は、「支那人と日本人とが真に理解ある交際をする為め従来時々会合をした事があるが未だ充分其の目的が達せられぬ」と述べていて、日中間の交流が表面的なものにとどまっていたことを示唆しています。民族の壁は、スポーツや宗教を以てしても越えがたかったのです。

４．満洲国と大連YMCA人脈（1932－1945）

日中間の対立はさらに激化し、満洲事変を迎えることになります。1932年３月には日本の傀儡国家満洲国が建国されます（大連は依然として関東州に属しました）。満洲国や関東州では、中国人が「満人」と呼ばれるようになります。中国本土との連帯意識を断ち切るためです。大連中華青年会も1932年８月に会名から「中華」を削り、大連青年会へと名称変更します。その後も大連青年会は陸上運動会と水上運動会を開催し、建国当初は大連の選手が満洲国のスポーツ界をリードしました。しかし、大連青年会の活動は徐々に低迷し、1936年についに解散に追い込まれます。大連中華YMCAも1932年を最後にスポーツ界での活動が見られなくなります[9)]。

大連ＹＭＣＡは従来どおり大連のバスケットボールとバレーボールを牽引しますが、その活動は1940年までしか確認できません。戦時体制のもとで、競技会の整理が行われ、大連YMCA主催の大会が淘汰されたと思われます。

この時期に関して着目したいのは、大連YMCAそのものよりも、むしろ大連YMCAが培ってきた日中交流の経験です。先述のとおり、満洲事変は日中間の対立が臨界点に達したときに起こりました。それから半年も経ずして成立した満洲国は、王道楽土、五族協和をスローガンに掲げました。『満洲建国十年史』はこれを「民族闘争より民族協和へ」（同書６頁）と表現していますが、問題はこの転換が突然生じたことにあります。日中交流の実績がほとんどない満洲で、はたして本当に五族協和が実現できるのか、暗中模索だったにちがいありません。そんななか、スポーツは満洲事変以前から日中交流を実践していた数少ない領域で、かつそのスペクタクル性もあって、五族協和を国内外に宣伝する最善の手段の一つと見なされるに至ります。

例を挙げましょう。建国後まもなく満洲国はリットン調査団を受け入れますが、満洲国が「三千万民衆ノ意向ヲ以テ」建国され、諸民族が協力和合していることを調査団に示すべく、さらには満洲国の住民に建国の事実を周知すべく、各地で建国記念運動会を開きました。その年の秋に

は、日本の明治神宮大会に相当する満洲国体育大会が新京で開かれます。この大会で古閑亮は進行係を務めます。古閑は大連YMCA副主事を辞めたあと[10]、満鉄に入社、大連市民政署を経て、満洲国文教部社会教育科長に就任していました。古閑が文教部に在籍した期間は短かったのですが、建国当初の重要な時期に体育を統轄する立場にいたことは強調されてよいでしょう。たとえば、1933年４月14日に満洲国文教部で開かれた体育連絡会議を取り仕切ったのが古閑でした。

この会議には大連YMCAの関係者がもう１人参加していました。黒田善八です。黒田は満洲国建国後、大連YMCAから新京特別市公署に転じました。大満洲帝国体育連盟主事、大満洲帝国排球協会理事長、大満洲帝国籃球協会参与として、黒田は一貫して満洲国のスポーツ行政に深く関わります。大連YMCAで得られた日中交流の経験は、満洲国を「文明化」するために活用されたのです。

おわりに

大連YMCAのスポーツ事業は、領土でもなく植民地でもない租借地という特殊な場で、日本、西洋、中国という３つのアクターによる複雑な交渉のなかで展開されました。第１期には、北米YMCA主事と日本人が協力して、日本人のスポーツ振興に努めました。それは、東アジアの文脈では、北米YMCAによるアジアの「文明化」の一端でした。ただ、中国や朝鮮と違って、大連の北米YMCA主事は、あくまで補佐役に徹しました。日本のナショナリズムが強かったからです。第２期には北米YMCA主事の影響力がさらに弱まりますが、大連YMCAが日本人スポーツ界で占める重要性もまた低下します。これ以降、大連YMCAはバスケットボールやバレーボールといったマイナーな競技で主導的役割を果たすにとどまりました。この時期には中国人の側でもスポーツが勃興します。大連中華青年会はスポーツをナショナリズムの道具として利用しました。第３期、日中間の対立の激化を受け、大連では中国人のスポーツが脱ナショナリズム化されます。一方で、奉天の張学良政権との間にスポーツ交流が生まれます。バスケットボールやバレーボールがその手段となったことで、大連YMCAはこの交流に大きな役割を果たしました。「はじめに」で、ナショナリズムと「文明化の使命」は１つのコインの裏表であると述べましたが、じつはこれは非対称な関係を前提とした議論でした。対等な関係のもとになされた第３期のスポーツ交流では、ナショナリズムの力と「文明化の使命」の力は均衡していたと考えられます。満洲事変を境に、日本人と中国人の関係が変化したことで、スポーツは「文明化の使命」の性格を強く帯びることになります。そのさい、大連YMCAによるスポーツ交流の経験が役立つことになりました。このように、スポーツは支配の手段にも、抵抗の手段にも、はたまた友好の手段にもなりえたのです。

注および引用・参考文献

１）近年のそうした試みの一つとして、Harald Fischer-Tiné, Stefan Huebner, and Ian Tyrrell eds., *Spreading Protestant Modernity: Global Perspectives on the Social Work of the YMCA and YWCA, 1889-1970*, University of Hawai'i Press, 2021を挙げておく。

２）日本YMCAのスポーツ事業に関する専著として、服部宏治『日本の都市YMCAにおけるスポーツの普及と展開：大正期から昭和期（戦前）を中心としたYMCAの「体育事業」』渓水社、2015年が挙げられるが、外地は考察の対象となっていない。

３）入江克己「日本近代における植民地体育政策の研究（第１報）：満州における体育政策の成立過程」『鳥取大学教育学部研究報告　教育科学』35巻２号、1993年は満洲国成立以前の満洲における日本人の体育・スポーツを「＜移植民＝自国民＞に対する＜皇民化＞政

策」であると同時に支配者のイメージを誇示することであったと論じる。皇民化政策を植民地的状況で他民族に対して強制的に行われる同化政策と定義するなら、入江の主張は成り立たない。在満日本人のスポーツは基本的に内地の延長で、愛好者が自発的に行っていた。体育には当てはまるところもあるが、満洲では内地と異なる独自の体育を追求する動きもあった。

4）ひとまず、高嶋航「満洲スポーツ史話（Ⅲ）」『京都大学文学部研究紀要』62号、2023年（予定）を挙げておく。

5）インドアベースボールがYMCAネットワークを通じて極東に広まったことは、高嶋航「女子野球の歴史を再考する：極東・YMCA・ジェンダー」『京都大学文学部研究紀要』58号、2019年で論じた。

6）高嶋航「満洲スポーツ史話（I）」『京都大学文学部研究紀要』60号、2021年。

7）高嶋航『国家とスポーツ：岡部平太と満洲の夢』KADOKAWA、2020年。

8）詳細は高嶋航「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」」『京都大学文学部研究紀要』57号、2018年を参照。

9）1933年12月に満洲の中国側YMCAは中国の全国組織から離脱し、満洲基督教青年会連合会を組織することを決定、大連もこれに従ったと考えられるが、その後の動向は不明。

10）古閑は1930年8月に大連YMCAに再加入していた。